最優秀賞

人と人がつながること

北陸学院中学校　三年　　新野蓮美

「絆」。　東日本大震災が起こった昨年、この字が世相を表す漢字に選ばれ、近年最も注目を浴びている言葉の一つではないでしょうか。「絆」とは辞書によると「人と人との断つことのできないつながり」という意味があります。親子、兄弟、友人、先輩、後輩・・。そんな人と人との関係が震災という不幸な出来事によって深まり、その大切さにようやく注目が集まるということに、人間の愚かな一面を垣間見たような気がしました。私達人間は毎日のように過ちを犯し、後悔の連続です。あの時、あの時とやり直したい人生の瞬間や人との関係が、私の中にいくつか存在しています。そんな出来事は、私の中だけではなく人類の歴史においても繰り返されているように思われます。

私は今年五月、修学旅行で沖縄を訪れ、六十七年前の出来事の延長線上に自分が立っていることを知りました。沖縄は日本で唯一地上戦が行われ、多くの命が失われたところです。平和の礎に刻まれたたくさんの人の名前が、その歴史が事実であることを物語っていました。その時、私の目の前に広がる青い海が、真っ黒な船によって埋め尽くされ、人の血によって真っ赤に染まったというガイドの話から、その光景を思い浮かべ、戦争は人の命を奪う恐ろしい出来事なのだと、漠然と感じていました。その頭の中の光景は、私にとってどこか遠く、私とは関係のない時代の出来事でしかありませんでした。空を見上げても爆弾が降ってくるわけでもなく、ましてや背後から襲われる心配をする必要を感じたこともない私には、実は、恐しいということにもどこか実感がなく、平和祈念資料館を後にすれば、沖縄戦を過去のものにしてしまいそうでした。そんな私が戦跡はただの見学地ではないと思いを変えたのが、ひめゆり学徒の一人であった、宮良ルリさんとの偶然の出会いでした。彼女は、

「今日ここに来たことを忘れないで。戦争のない世の中にしてね。」

と私の手を握って、祈るように話されました。戦争はこの人の身の上に起こった事実なのだということを、その手が語っているのを感じました。

終戦から今年で六十七年。この六十七年間は、宮良ルリさんのような「戦争のない世界を」と願う人達の思いによって、守られてきたといえるのではないでしょうか。次の世代への平和を願い続けたたくさんの思いが、今のこの平和を継続させてきたのだと私は思います。だとすれば、この先の六十七年後にもこの「平和」な世の中を継続させていくことが、今を生きる私達の役割なのではないかと思います。私は宮良ルリさんを通して、時代と時代を結ぶ役目を背負ったのだと感じています。時代と時代は人によってつながれるものであり、決して切り離されるものではありません。人と人がそうであるように、時代もまた人によってむすばれるものだと思います。

「絆」という言葉がブームであってはなりません。戦後や被災後のつらいときに、にわかに注目される言葉なのではなく、当たり前の平和な中でこそ、大切に感じていきたい言葉だと思います。その「絆」という言葉を一人ひとりが心の中に持っているということが、平和な世界を実現していく一つの方法なのかもしれません。だから、人と人がつながることを私自身が大切にしていきたいと思います。

優秀賞

自分「自信」と向き合って

金沢市立浅野川中学校三年　井上　陽奈子

それぞれの人の心に芽生える“自信”というものは一体どこからくるものなのか。

皆さんは一度でもそんなことを詳しく考えたことはありますか。

発表会のときや試合のとき、くじけそうになったときなど、自分が、または友人が不安になっているときに、「自信をもって頑張って。」と励ましたりするとき、自然と自信という単語を使うことがよくあると思います。ですが、自信という言葉そのものの意味を具体的に説明して下さい、なんて問われたら、返答に困る人も多いのではないでしょうか。

かくいう私も明確に自信というものを説明することはできないでいました。しかし、この夏、その答えが一つだけ見つかったのです。

私は吹奏楽部に所属して打楽器を担当しています。また、浅野川中の生徒会長も務めています。私は音楽も大好きだったのですが、浅野川中をもっともっとよりよい学校にすることに貢献したいと思い、生徒会長に立候補しました。

吹奏楽部は日々の地道な練習がとても重要な部活です。そんな中、部活と生徒会をかけもちしているため、どうしても練習時間が不足します。その分、少しの時間でも集中して練習したり、生徒会の仕事を早くおわらせて時間をつくるなど工夫と努力はしてきたつもりでした。

そうやって何としても他の仲間たちに追いつきたいという気持ちが先走ってしまい次第に部活に対しての楽しさを見失っていたのかもしれません。練習が楽しくなくなり、あせりだけが私の中に生まれてきたのです。“コンクールなんかなくなればいいのに”と思ったりもしました。出来ることなら今すぐ逃げ出してしまいたかったのです。

そんなある日、打楽器パートにプロで活躍している先生が来て下さいました。けれども今の私にはレッスンなんて苦痛でしかありません。やりきれない気持ちで先生を迎えてしまったのです。先生はすぐにレッスンには入らずに、

「コンクールに出たいと思う？」

と打楽器の全員に質問しました。皆、はっきりと、出たいですと答えていく中、私は悩んでいました。正直なところコンクールなんて出たくないけれどここは周りに合わせた方が、嘘をついた方が賢明ではないのかと考えている内に私が答える番になりました。

「あなたはコンクールに出たい？」

「・・・出たくは、ないです。」

と言ってしまい仲間たちの雰囲気を壊すことになってしまいました。

「どうして出たくないの？」

「不安だからです。」

自分が今さらどうしたところで上手くはなれないし、このままじゃコンクールに出てもみんなの足を引っ張るだけという事が嫌だったし不安でした。そんなことをせきを切ったように話す私に先生は口を開き

「自信ってね、どんな字を書くかしってる？」と聞いてきました。

「自分を信じる・・・ですか。」

「そう。少ない時間でも頑張らなきゃってたくさん練習したんでしょう？それは決して無駄じゃないの。その練習を、練習をした自分を信じてあげなさい。」

言われて初めてなるべく考えないようにしてた辛い毎日を思い返していました。そして、不安であることを言い訳にして自分の練習不足や楽曲に対する真っすぐな気持ち、それより何よりも音楽で人を感動させるという、自分の一番大切で純粋な気持ちを失っていた自分に気づいた時、自然と涙が溢れていました。

自信とは、それまでの苦労や努力をした自分と向き合い、認めて、信じてあげることで自ずと心にわいてくるものなのではないかと思えたのです。

そう考えると、毎日毎日、生徒会室で遅くまで合唱コンクールや運動会の企画、準備で苦労したことや、部活の仲間たちに迷惑をかけたり、喜び合ったりしていた時間そのものが、私自身のパワーや自信につながるのではないかと思えるようになりました。

当時何もかも放り出して逃げ出さなかったことを今ではとても良かったと思えます。そして同時にこのような思いをもっと多くの中学生にも感じてもらいたいと思い、この主張文を書きました。たくさんの辛いことがあっても、それはきっと、大切なことに気づかせてくれるための壁であり、道であると思ったからです。

今、もう一度コンクールに出たい？と質問されれば、

「はい。出たいです。」と大きな声ではっきり言える自分が、今ここにいます。

優秀賞

それでも生きてゆく

白山市立鳥越中学校三年　　森　由生

テロップが映し出す奪われてゆく命の数。すべてを流し去るような大きな波。昨年の三月十一日、私はその映画のワンシーンのような映像をテレビの前でじっと見つめていました。約一万五千人の方が亡くなった東日本大震災。一年以上たった今でも、何千人もの行方不明者がいて、被災地の抱える問題は山積みです。しかし、この震災は日本人が忘れかけていた大切なことを見つめ直す機会にもなったのではないでしょうか。

先日、テレビで外国人の方が「自分の国で震災が起こると、必ず略奪・暴動が生じる。だが、日本人はこんな状況の中でも秩序を乱さない。そういうところが素晴らしい。」と言っているのを見ました。自分勝手な事件がありふれたこの世の中。ただでさえ周りが見えなくなるような状況でも、謙虚に誇りを忘れずに生きる、そんな心がまだ日本人に残っていたと思うと、とても嬉しくなりました。

また、被災地へボランティアに行った両親の体験の中で印象に残った話があります。余震が起きた時のことです。側にいた住人の方が母の肩をそっと守るように抱き、「怖い思いをさせてごめんね。」と優しく言って下さったそうです。郷土も失い、たくさんの不安にかられているだろうに、どうして他人のことを思いやることが出来るのでしょうか。支え合い、助け合おうとするその心は美しく、間違いなく人間の強さであると私は思うのです。

そして、子供たちもまた、強く前へ進もうとしています。私は「被災地の子供たちを石川によぶ」という企画にボランティアとして参加しました。長期休暇中の数週間、共に生活をして、それまで他人ごとのように感じていた地震速報も、子供たちの町が出るたびに胸が締め付けられるように痛くなりました。一緒にご飯を作ったり、掃除をしたり、川遊びをしたり、元気で純粋な笑顔をたくさんもらいました。そして合宿も終わりに近づいたある日、みんなが私に色々な話を聞かせてくれました。その中である子はこう言いました。「私の家なくなっちゃったの…。」またある子は「放射能で外で遊べないんだ…。」私はその時、返す言葉が見つかりませんでした。あの輝く笑顔の裏で、私より小さな子供たちがこんなに大きな不安と闘っていたのかと私は初めて気づいたのです。子供たちの話す震災は、テレビのどんな映像よりもはるかに恐怖を感じさせ、新聞で見た統計的な数字の中の一人一人の命の重みを、改めて考えさせるのでした。しかし、みな悲しそうに話していたわけではありません。子供たちなりに現実を受けとめ、強く生きていこうと自らを奮い立たせているようにさえ私には見えました。

歴史を振り返ると、今まで日本人はたくさんの困難な出来事を乗り越えてきました。今は、私たちの世代が希望を持って明日に向かっていける社会を作ってゆく番なのです。

そして忘れないでいたいです。今ある生活がどれだけ幸せで、奇跡で溢れているかということを。人のために生きてこその命。無駄使いせず、一日一日を噛み締めて生きていこうと思います。

私の心臓は今、脈を打って動いています。なんて幸せなのでしょう。

今日も私は、生きています。

奨励賞

自分を変える

七尾市立朝日中学校三年　竹森　清志

今、僕は生徒会長をしています、会長になるまでの僕は、少し弱気でした。自分の意思をしっかりと伝えることができなかったし、積極的に行動できていませんでした。「こんな自分を変えたい、何かやってみたい」と思ったときに頭にあったのが、生徒会でした。

みんなで意見を出し合って学校を変えていく、それはとても格好良く、自分のやりたいことに当てはまっていました。でも、「こんな自分にできるのか？役員になっても恥をかくだけじゃないのか？」そういう余計な不安が頭をよぎりました。

しかし、そんなとき友達に声をかけられたのです。「清志、生徒会長やってくれんけ」僕は迷いながらも「やってみようかな」と返事をしました。すると、そのことは瞬く間に学校中に知れ渡ってしまい、もう腹をくくるしかなくなったのです。

僕はそのときから、自分の気持ちを変えました。手本にならなければ！と思って、授業中にはなるべく手を挙げるようにし、積極的に行動しました。友達からも「がんばれ」「応援しているぞ」と言われるたび、期待に応えようとがんばりました。

立会演説会では、次の三つを訴えました。まず一つ目「反射たすきの着用率百パーセントを目指しましょう。」

二つ目「挨拶ができる朝日中生徒を目指しましょう。」

三つ目「意見箱を使って、みんなの声を聞きながら、学校を良くしていきます。」

そこで、生徒会長になってから、挨拶の強化をするために集会で取り組みをしました。寸劇で挨拶の良い例、悪い例を見比べてもらおうという試みです。挨拶の悪い例を見せた後、「いまのはどこが悪かったでしょうか？」と生徒に問いかけて見たところ、打ち合わせもしていないのに何人かの生徒が手を挙げてくれました。僕はそれを見た瞬間、「おお！上がった！」とすこし驚きました。それと同時に、うれしい気持ちになりました。その劇が終わった後、他の生徒・友達から「あの劇良かったよ！」「すごかったね！」などと言ってもらいました。後日先生に「あの劇のおかげで挨拶良くなりましたよ！」そう言われたとき、「自分は少しでも、学校を良くするために役に立てた！」と、大きな達成感を味わうことができました。

また、別の日の集会で、授業中の挙手・そうじの取り組み方・部活動の取り組み方についても寸劇をしたところ、それも効果がでて生徒会役員の活動がだんだんと楽しくなっていきました。

しかし、生徒会活動に力を入れれば入れるほど、部活動にいけなくなりチームのメンバーに迷惑をかけてしまいました。とても辛かったです。だからこそ部活動ができる日は一生懸命取り組みました。練習量の差を埋めていくよう努力して乗り越えました。

このようにして僕は変わってきました。意思を強く持つことで、自分の意見を貫き通せるようになりました。辛いことにもめげずに立ち向かえるようになりました。そして朝日中学校も少しずつ変わってきました。

周りを変えるにはまず自分を変えなければいけません。これからも新しい自分をつくり学校を良くしていきます！

奨励賞

働くということ

かほく市立河北台中学校三年　　加藤　利奈

働くことに意味はたくさんあると思います。お金を稼ぐため、人の役に立つため、自分の得意なことを生かすためなど、人によって優先順位はちがうかもしれませんが、一番大切なのは、その仕事に「誇り」を持つことができるということではないでしょうか。

私は、去年の夏休み、三日間老人ホームでわくワーク体験をしました。最初は働くということに対して、あまり興味がわかず、まだまだ先のことだと思っていました。

そんな軽い気持ちで老人ホームに行った私がまず任された仕事は、お年寄りとの会話でした。何度も同じことを聞いてくる方もいて、会話をすることだけなのに私はとても疲れてしまいました。

次に任された仕事は、食事の準備でした。私が一番、驚いたのは、コーヒーを飲む時でも、のどを通りやすいようにとろみ剤という粉を入れトロトロにしていたことです。介護士の方はそんな細かいことにも気を遣いながら働いていることを知りました。

その他移動のお手伝いなど、いろいろな仕事をしましたが、私にとって一番大変だった仕事は、布団のシーツの取り換えでした。単純な作業でしたが、これを何回も繰り返すのがものすごく大変だと思いました。

私は、これだけでもうくたくたになってしまいました。でも、私よりも何倍も働いている介護士の方はずっと笑ってお年寄りの方と接していました。私は「どうしてずっと笑顔でいられるんですか。」と思わずたずねてしまいました。介護士の方は「それは、お年寄りの方が笑ってくれたり、ありがとうと言ってくれたりすると元気が出るからだよ。」と話してくれました。私は今まで介護士の方がお年寄りの方を一方的に支えているのかと思っていたけど、介護士の方もお年寄りの方もお互いに支え合っていることを知りました。

私はこの三日間で働くことの大切さに気づかされました。

介護という仕事は、一般的に汚いとか面倒だとか、あまり好まれるような仕事ではないように思われがちですが、経験してみて、介護という仕事が「誇り」を持つことができる仕事だと本当に実感しました。事実、私がお世話になった介護士の方々の仕事ぶりや表情から、介護という仕事に対する「誇り」を強く感じました。

私は、この体験の後、これまで以上に何事にも積極的にチャレンジしてみようと決めました。三年生になって生徒会長になりました。勉強・部活動だけでなく生徒会の仕事をするのは、正直大変で、忙しい日々を送ることになりましたが、周りのみんなの笑顔に元気をもらい、忙しくても頑張れるぞというやる気がでました。

九月初め、前期最大の生徒会行事であった「体育祭」が終わりました。一学期の半ばから、計画を立て、夏休みから準備してきました。当日、みんなが笑顔で競技に参加する姿、自分の団のために必死になって走ったり、跳んだりする姿に、私はここまで頑張ってきて本当に良かった、生徒会長という仕事をやり遂げたんだという充実感を感じました。

たった三日間のわくワーク体験でしたが、私にとって「働く」ということがどんなものかよくわかりました。そして、そこから得たものは、私にとって非常に大きなものでした。私はこれからどのような進路を進むかまだしっかりと決めていません。でも、自分が選んだ仕事、任された仕事に「誇り」が持つことができるよう、前向きに精一杯取り組んでいきたいです。

奨励賞

外見は違っても・・・

加賀市立山中中学校三年　　日比野　康次

僕が小学二年生の時、家が火事になり、僕と兄と母は体に火傷を負いました。その時、僕は主に顔や手に火傷を負い、病院から退院する頃、僕の顔は「友達とは違った顔。」になっていました。

退院してから学校へ行くとき、ずっと僕は学校へ行くのが嫌でした。なぜなら、みんなとは違う外見になった僕を友達が受け入れてくれるのかどうか、とても心配で、怖かったからです。学校へ行くと、みんな驚いていました。何と言われるかとても怖かったです。しかしみんなは、「大丈夫か。」とか、「元気か。」など、外見より、体の心配をしてくれました。僕はその時、とてもうれしくなりました。その後もみんなは、僕が火傷を負う前と変わらずに接してくれました。そのおかげで今の自分があると僕は思います。

しかし、五年生の時の遠足で、僕はとても悲しい気持になりました。その遠足ではほかの小学校の生徒も来ており、その生徒に僕は「見ろ、あいつ変な顔だ。」と大声で笑われました。その言われた時の気持ちは何とも言えませんでした。とても悲しくて、くやしくて。

僕も今までに外見が変わっている人を見て「気持悪いなあ。」とか「変だなあ。」と思うことはありました。しかし、実際に自分がその立場になると、とてもつらい気持ちになるということをそのとき強く感じました。

家に帰って笑われたことを母に話すと、母は、「いくら笑われてもお前はお前なんやから気にすんな。」と言いました。その時、僕はとても救われた気持になりました。たとえ外見は変わっても中身は変わらない自分のままである、ということを知り、前向きに生きていこうと思えました。

しかし、やはり、多くの知らない人が集まる所や、小さい子供達が集まる所には、あまり行きたくありませんでした。中学校に入学する時も、とても不安でした。しかし、今はその不安が嘘の様に楽しく生活しています。

自分が周りの人とは違う外見であるということに感謝している、と言える程、僕は心が広くないし、強くもありません。でもこれだけは言えます。みなさんも、これから生きていくうえで、外見が変わった人に出会うことがあると思います。そんな人を見て、「気持悪くない、全然普通だ。」と思えることは難しいと思います。しかし、誰も、自分から好きで、そのような外見になったわけではありません。ですから、変わった外見の人を見ても、決して、笑ったり、気持悪いと言ったりしないで欲しいのです。そして、絶対に差別をしないでください。たとえどれだけ外見が変わったとしても、その人の中身はその人のままなのですから。

僕が今、明るく生きていられるのは、周りの友達や両親の優しさがあるからです。その優しさを忘れず、精一杯感謝して生きていこうと思います。たとえいくら外見が友達と違っても、中身はそのままで。

奨励賞

わたしもみんなも幸せになる社会をつくる人になろう

加賀市立山代中学校　三年　南　銀河

今、日本全国でイジメが大きな問題になっています。それは、大津市の中学生が自殺し、その原因や学校の対応について、連日報道されたからです。イジメで自殺するというのはドラマで見たことはありますが、実際にイジメで人の命がなくなってしまうことは、とても悲しく、憤りさえ感じます。

僕はイジメられている人の気持ちがよく分かります。

なぜなら、僕は小学校時代、イジメを受けていたからです。

クラスの人に話しかけても話を返してくれなかったり、自分の筆記用具や靴がゴミ箱に捨てられたりしました。

画鋲が入っているとは知らずに靴を履き、痛い思いをしたこともありました。そのことで、とても惨めな気持ちになりました。

こんなイジメが、いつまで続くんだろうと心配でたまりませんでした。

クラスのみんなに無視されていた僕は、いつも一人で本を読んでいました。当時の僕には、頼れる友達も先生もいませんでした。

両親にも言うことができず、学校が怖くなり、熱が出たり、吐き気がしたりするなど、体が拒絶反応を起こすまでになっていました。

この頃は、孤立する空しさや辛さだけでなく、自分自身の無力さ、ふがいなさなど様々なことを思い知らされました。

しかし、小学校卒業を目の前にして、嫌がらせや無視はなくなっていきました。まぜイジメられていたのか、なぜイジメが解消したのかは、結局、僕にはわかりませんでした。

中学生になってからは、僕をイジメていた小学校の人とも仲良くなり、新しい友だちもたくさんできました。

でも、孤立していた小学校のとき、今のように友だちがたくさんいたら、どうなっていたんだろうと考えることがあります。僕の辛く落ち込んだ気持ちも、少しは変わっていたはずです。

イジメを受けていた僕だから思えることがあります。

それは、イジメている人たちは、はじめ何気ない気持ちでイジメをし、イジメられている人が困って、辛い顔をするのを見て楽しんでいるのに対して、イジメられている本人はとても苦しんでいるということです。それは大変深刻な問題なのです。

そして、自分の力ではどうしても解決できないと思った時、大津の中学生のように自殺まで考えてしまうのだと思います。

また、今のイジメについては、新たな問題も発生しています。それは、イジメる・イジメられている当事者だけではなく、その波紋や連鎖は、大人や社会をも巻き込む大きな問題となっていることです。先に話した大津のイジメ事件の加害者は実名や写真がインターネット上に流出しています。僕は、これもおかしなことだと思います。確かにイジメたことは大変罪深いことですが、そのことで不特定多数の人間からバッシングを受けること自体、イジメの構造そのものだと思うからです。

僕の通う山代中学校には「わたしもみんなも幸せになる社会をつくる人になろう」という素晴らしい校訓があります。僕は「幸せな社会」とは、イジメのない社会だと思います。自分が他の人の役に立つことを願い、その人が喜ぶ姿を見て、自分も喜べる、そんな世界だと思います。

今、僕は、山代中学校で執行部をしています。生徒会が中心となって、山代中学校の校訓を目標に、全校生徒に実態アンケートを行い、目安箱のピーアールを進めるなど、学校でイジメゼロ作戦は動きはじめています。

お互いがそれぞれの個性を認め合い、友だちの気持ちを考えることができるようになれば、少しずつイジメはなくなっていくと思います。そして、いつの日かイジメがこの世からなくなることを、僕は望んでいます。

奨励賞

人間関係の難しさ

白山市立光野中学校三年
茶谷　萌

皆さんは中学生になって人間関係って難しいなあ…。めんどくさい、つかれるなあ…。と思ったことはありませんか？私はあります。そして今は、難しくてあたり前なんだと感じています。

人間関係って難しい…。そう、思ったのは中学校一年生のときでした。テニス部に入って半年ぐらいの間、私はいじめられていました。きっかけは…何だろう？東明小学校から入ったのは私だけで何となく…たぶん、性格がうっとうしかったのだと思います。今から考えても厳しい環境でした。小学校が同じだった女子は同じクラスに二人だけ、つまり私ともう一人だけでした。誰に話しかけてよいか分からず、クラスでの関係がまだあやふやな頃、テニス部に一人で入った私は、不安でいっぱいでした。何をするにも「ねえねえ、これどうすればいいの？」と聞いてばかりいた私は、正直、うっとうしかったのかもしれません。

“いじめ”と言ってもいろんなパターンがありました。休憩時間に必ずはぶかれる、無視。仲間に入れないでいると、「こっちきたいなら、そう言えばいいのにねえ？」と言われ、「そうか、なるほど。」と思って声をかけると、「はあ？」と笑われる。そしてへこむの繰り返しでした。だんだん自信もなくなっていって、ずーっとおどおどしていました。それがますます今でいうウザかったのかもしれません。

でも、一人のときに話しかけると、普通に話してくれる人もいました。ずーんとへこんでいた私にとって、どんなに励みになったか分かりません。

私なりの努力もしました。暗いのがいけないのかもしれない！と思い、一日中、一週間ぐらいずーっとニコニコしていました。そうしたら、「茶めぐっていつも笑顔だね。まあ、いいことなんだろうけど。」と少しひかれたというか呆れられた感じでした。私は今だったら、話しかけてくれたということにとても感動して、やったーと思うのですが、なにせとてもネガティブだったので、「ああ…また変なことしちゃったかな…。」と思いました。

次にした努力は開き直っちゃえ！でした。おどおどしているから悪いんだ！じゃあ自信を持って話してみよう！ということで、その実践をしたのが部室の前でした。ある人が荷物を出していて、私にぶつかって、「あ、ごめん…ってなんだおまえか。」と言いました。私は思い切って「私で悪かったね。」と言いました。以前の私なら、「ごめんなさい…。」とへこんでいたでしょう。でも、少し勇気をだしただけで、その人は笑ってくれました。その笑顔がなんだかすとんとおちてきてとてもうれしかったです。それがきっかけ…とは言えませんが、そこから、自分自身が、まわりの空気が少しずつ変わっていったのも事実です。

いじめってみんな嫌いですよね。いじめられて嫌な気持ちになるのはきっとみんな同じです。もちろん、私も嫌いです。大嫌いです。いじめられている間、本当につらかったですから。でも今は少しだけ感謝しています。おかげで“自分”というものを知る、認める良い機会になりました。自分の変わっているところ、弱いところを知りました。それを認めることによって開き直ることも大切だということも知りました。自分の意見を持つことそしてその意見を大切にすることも、とても大事だなと思いました。

今、人間関係って難しい…そう思っている皆さん、人間関係って難しいんです。体も心も発達する中学生なんて特にそうです。けれども、どうせ何をしたって無駄、いじめなんてなくならないんだから…なんて思わないで下さい。真剣に向かい合ってみて下さい。そうすればきっと出口は見つかります。そしてきちんと向かい合えた人は、きっと今よりずっと成長できると思います。

奨励賞

ひいばあちゃんの笑顔

七尾市立能登香島中学校三年　　竹中　千里

私には、九十三歳のひいばあちゃんがいます。祖父と祖母は、私たち姉妹が生まれる前に亡くなっており、忙しく働く父と母に代わって私たち姉妹を幼い頃からずっと育ててくれたのがひいばあちゃんでした。

ひいばあちゃんはいつもニコニコしていて、優しくて、よく冗談を言って周りの人たちを笑顔にしてくれるひょうきん者です。だから、ひいばあちゃんの周りには笑顔が絶えません。

そんなひいばあちゃんが数年前から、認知症という病気になってしまいました。私は、ひいばあちゃんが認知症だということを知ったときは、とてもショックでした。はじめはふつうの物忘れかな？と思っていたけど、だんだんおかしなことを言うようになって、最近起こったできごとまで、忘れてしまうようになりました。ひいばあちゃんへの対応をどうしたらいいのか分からなくなってきた私たち家族は、家族会議を開くことにしました。ひいばあちゃんをどうするか！老人施設に入れることも考えました。しかし、家族みんなで話し合った結果、住み慣れたこの家で暮らせるようにしようということになりました。

母はよく、ひいばあちゃんに、

「ばあちゃん、何歳や？」「ばあちゃん、ちぃー何歳やったいね？」と質問します。すると、ひいばあちゃんは、

「７０歳や。」と言ったり、私のことなんて、時には小学生、時には高校生になっていたり、毎回トンチンカンな答えが返ってきます。そして、そんなやりとりをしていると、決まって家族みんなが笑顔になります。ひいばあちゃんも笑顔になります。

私はあるとき、そんなやりとりを見ていて、ひいばあちゃんをバカにしているように感じました。そこで、老人施設で仕事をしている母に、相談してみました。すると母は、「たしかに、ばあちゃんのこと、バカにしとるように聞こえるかもしらんね。でもお母さん、ばあちゃんにはばあちゃんらしく、ずっと笑っとってほしいげん。」と言いました。私は、その時はまだ、その言葉の意味を理解することができず、ずっと考えていました。そして、やっと私がたどりついた答えは、ひいばあちゃんの笑顔を大切にするということです。ひいばあちゃんとのやりとりは認知症になる前とは、交わす言葉は違ってもみんなが笑顔になるという雰囲気は何も変わっていません。毎日、たわいもない会話が繰り返されていますが、そこにはひいばあちゃんの個性を大切にするという思いがあったのです。

ある日私は、ひいばあちゃんに、

「ばあちゃん、ちぃーの誕生日分かる？」と聞いてみました。すると、数年前までなら即答だったひいばあちゃんが、困った顔をして、「何月やったかなぁー。」と言うのです。

すごくショックでした。そして、イライラしてしまった私は、

「なんでなんでもかも忘れてしまうん！」とどなってしまいました。すると、ひいばあちゃんは、「ごめんなあ。」と笑顔であやまってきました。しかし、その笑顔は、いつもの無邪気な笑顔ではなく、どこか悲しく、暗い笑顔でした。私は、そんなひいばあちゃんの笑顔を見たことがなかったので、とても悲しい気持ちになりました。

そんな経験をして、私は気付きました。それは、私たち家族がずっと笑顔でいれば、ひいばあちゃんも喜んでくれるけど、それ以上にひいばあちゃんの笑顔が私たち家族の支えになっているということです。

私は、ひいばあちゃんの笑顔が大好きです。だから、これからもずっとひいばあちゃんの笑顔を守っていきたいです。

奨励賞

母からの手紙

津幡町立津幡南中学校三年　　細山　久瑠実

私の将来の夢、それは看護師になることです。尊敬している母と同じ仕事について、母の意志をつぎたいと思っています。

看護師として二十年近く働いてきた母は五年前の三月、突然亡くなりました。柔道の試合が終わり帰って来ると、仏間で静かに母は目を閉じていました。めったに泣かない父が泣いていました。父の泣き顔はあの時初めて見ました。兄も泣きくずれていましたが、この時私はあまりに突然のことで混乱し、ぼう然としていました。そのあと自分の部屋へ行くとやっと、現実を受け止めることができて、涙があふれてきました。いろいろな場面での母の笑顔が浮かんできます。小さい頃に何度も行った温泉。六歳で初めてのジェットコースター。最後に食べたグラタン、すごくあったかくておいしかった。私は一人で声をあげて泣きました。落ちついた頃に母が残した二通の手紙が父から私と兄にそれぞれ渡されました。私への手紙には、短いけれど心のこもった字でこのように書かれてありました。

久瑠実へ

くるみはまじめて優しいからがんばったらぜったい夢はかなうからね。母さんより

これと一緒に渡されたのは、倶利伽羅不動尊のお守りです。母が私たちの幸せを願って用意してくれたものでした。この手紙とお守りを今も私は常に持ち歩いています。

小さい頃に母が、

「ナースキャップみせてあげる」

と思いついたように言い、押し入れの中をごそごそ探し始めたことがあります。私がその後ろ姿をじっと見つめていると、振り返ってにっこり笑い

「ねえ、なんでナースキャップかぶらんくなったか分かる？」

「分からん。」

そう答えると、

「それはな、ナースキャップについたゴミやほこりが落ちてきて、不潔やからなんやよ。」と、分かりやすく説明してくれました。母のことや看護師のことをもっとたくさん知りたい。そして、将来は看護師になりたいとその時、強く思いました。

今、私が質問したくても母から返事は返ってきません。寂しく思います。それで、看護師の夢をあきらめかけたこともあります。けれど、中学三年間、柔道を続けてきて私が学んだことは、どんなに苦しくても目標を持っていれば、頑張れるということです。ロンドンオリンピックで大活躍した日本の選手たちは、メダルをとるまで何度もくじけそうになり、夢をあきらめかけたと聞いてきます。けれど「ここまで夢を持ちがんばってきて、よかった」と答える姿は輝いていました。

この頃私は、看護師という仕事について、以前よりもさらに深く考えるようになりました。もし、私が看護師になることができたら、そこでたくさんの人と出会うでしょう。クラスにいろんな性格の人がいるように、病院には立場や性格の違うたくさんの人がいます。中には私が苦手だと思う人がいるかもしれないし、突然患者さんから怒られることもあるかもしれません。今、私は正直なところ、苦手な人とは関わりたくないと思い、避けて通ろうとしますが、看護師はそれでは通用しないでしょう。命や人の心に関わる仕事なので、ミスも許されません。ミスすれば、たくさんの人に迷惑をかけてしまいます。失敗したり、強く叱られると、落ち込んで声が小さくなってしまうような今の私をこれから少しずつでも変えていかなければいけないと思います。私はこれから自分が出会う人を大切にしたいと思っています。人を大切にするためには、自分の心が安定していることが必要です。何事も前向きに受けとめて、看護師としても、人間としても立派な人生を歩みたいと心から思います。

奨励賞

あの日から僕は・・・

七尾市立七尾東部中学校三年　　深浦　雅也

ある雨の日、僕は七尾鹿島新人大会の初戦、キーパーとしてピッチに立っていました。

試合は０対０、後半も終了間際。相手がシュートを打ってきた時のことです。僕は「捕れるだろう」と油断していました。しかし、ボールは自分の手の上をはじき、ゴールに吸い込まれていきました。試合はそのまま終了。自分のせいで負けてしまったのです。ぼうぜんとベンチに戻った僕は、悔しさのあまりグローブを地面に叩き付けました。

秋も深まった頃、紅白戦が行われました。どういうわけか、その日の僕は来たシュートを何本も止めます。練習後、ふと思いました。

「あれ、うまくなっている・・・」

確かに僕は、新人戦のあと、同じ失敗を繰り返さないようにと、いつも心がけて練習に取り組んでいました。一本のシュートも気を抜かず、基本動作の一つ一つを丁寧に行ってきました。その結果、いつの間にか上達していたのです。

つまり、あの雨の日の敗戦がきっかけで、僕はもっと上手になろうという向上心をもつことができたのです。そう考えると、あの敗戦は、今の自分にとっていい経験だったのではないかと思いました。

そこで僕は、ひとつの大切なことに気付きました。「失敗は、その後の自分を成長させる」ということです。

僕には、鮮明に覚えているいくつかの苦い思い出があります。

幼い頃、友人の家に行った時に、友人の親にあいさつをせずに上がってしまい、友人に「あいさつは礼儀やぞ」と怒られたことがありました。僕にとって、あいさつが重要なものとして位置づけられたのは、このことがきっかけだったように思います。

また、自分勝手に高価なものを買ってしまったとき、「誰かに相談してから買え」と叱られたこともありました。それ以来、本当に必要かどうかをよく考えてから買うようになりました。

サッカーだけではなく、自分の生活の中にも、失敗したことがきっかけで成長できた経験が、たくさんあることに気づきました。

僕は、「失敗は大切だ」という考え方をもってから、いいことがたくさんありました。

その中でも特に役立ったのは、テストです。

僕は二年生最後のテストであまりいい点が取れませんでした。原因ははっきりしています。勉強不足です。テスト間近になっても、ろくに勉強もせずに遊んでばかりいたことが、テストの点数を下げたのです。

この失敗を活かして、三年生最初の定期テストでは、二、三週間前から計画的に勉強し、勉強時間も倍近く取りました。結果、三年間の自己ベストを出すことが出き、大きな達成感を得ることができました。

もし、「人生」に失敗がなくなったら、どうなるのでしょうか。自分がつかみ取ってきた成功も成長も、その時感じた「頑張ってよかった」という達成感も、なくなってしまうのではないでしょうか。それらのない人生は、まったく面白味のない人生だと思います。

人間は、失敗せずには生きていくことができません。しかし、失敗を恐れずに、挑戦することが大切です。挑戦することで、はじめて得られるものがあるのです。

「失敗は成功のもと」という言葉があります。あの雨の日の失点以来、改めて、この言葉のもつ意味の深さに気づきました。失敗を恐れずに、むしろ、どんどん失敗する覚悟でいくぐらいの気持ちを持つべきだと思います。

これからも、僕は生きていく上で「失敗」は必ずすると思います。

しかし、その失敗の一つ一つは必ず成功につながっているということを忘れずに、生活していこうと思います。

奨励賞

笑顔を守るために

石川県立金沢錦丘中学校三年　西野　光柚

「おねえちゃん、いっしょにあそぼう！」そう言って女の子は私に微笑みかけてくれました。

私は去年の職場体験で訪れた病院で四歳の女の子に出会いました。初めての職場体験で緊張していた私は、ずっと不安な気持ちでいました。そんな私に明るく話しかけてくれた女の子。私はその子の気持ちが嬉しくて、こわばっていた心が温かくなっていくのを感じました。女の子の無邪気な笑顔に、私も笑顔になりました。

皆さんも子供の何気ない行動に元気をもらった経験があるのではないでしょうか。子供達の笑顔は私達を勇気づけてくれます。

しかし、そんな子供達に虐待を行う親は後をたちません。罪のない子供達が親からの暴力や育児放棄によって命を落としています。

今から二年前のことでした。あの凄惨な事件を私は今も忘れることができません。

二〇十〇年六月、大阪のマンションの一室で三歳と一歳の兄弟が母親の育児放棄によって餓死しました。母親は子供達を監禁し、一切の食事を与えませんでした。閉ざされた部屋からは昼夜を問わず、子供達の泣き声が聞こえていたそうです。数週間後、亡くなっている二人が発見されました。

私は亡くなった二人のことを思うと心が痛みます。残された子供達がどんな思いで母親の帰りを待っていたのかを考えると、本当にいたたまれない気持ちになります。食べ物もない、逃げることも適わない、このままでは子供達が死んでしまう。母親はそうわかっていたはずです。我が子を見殺しにした彼女を私は絶対に許してはならないと思います。

しかし、子供を育てるというのは簡単なことではないのだとも思います。子供は愛らしい反面、やんちゃでいたずらをすることだってあるからです。私も三歳のいとこのお守りを任された時、本当に苦労しました。抱っこをすれば髪の毛を引っ張るし、私がいくら「ばっちいから触っちゃだめ」と言っても、何でも拾って口に入れようとします。どうして分かってくれないんだろう。私の方が困り果てて、パニックになってしまいそうでした。それでも、おばさんが迎えに来たとき、「まだバイバイしたくない。」と泣き出したいとこを見て、私は、「ああ、やっぱり子供って可愛いなあ。」と思ったのです。

もしかしたら、事件を起こした母親は、こんな子供をいとしく思った経験がなかったのかもしれません。育児に疲れ、全てを投げ出したくなったのかもしれません。そんなきもちになることもあるのだろうとは思います。

しかし、親が子供を見捨てては、誰が子供を育てるのでしょうか。やはり虐待を子育て疲れだといって見過ごすことはできません。

私は、あのような凄惨な事件を二度と繰り返さないために、小中学生の頃からもっと子供達とふれあう機会があれば良いと思います。

子供達と接し、子供の可愛らしさや愛らしさを知って欲しいと思います。言うことを聞かず、大人を困らせる所もありますが、時には叱り、時には優しい気持ちで許してあげて欲しいと思います。

楽しい経験だけでなく、実際に起こる少し苦い経験もしておくことで、私達が本当の親になったとき、もっと上手に子供と接することが出きるのではないでしょうか。

子供を慈しみ、そして子供達と正しく向き合う。それが私達を勇気づけてくれる子供達の笑顔を守る第一歩だと私は考えます。

奨励賞

亡き祖母のためのパヴァーヌ

金沢市立港中学校　二年　　門　初乃実

あなたは、大切な人を突然失った時の喪失感を味わったことがありますか。私は今でも思い出しただけで、息がつまりそうになります。

半年前、私は祖母を亡くしました。祖母は私にとって、第二の母のような人でした。忙しい母にかわって幼い頃から毎日のように面倒をみてもらっていました。いろんな所へ私を連れていき、多くの自然に触れさせてくれました。それから、いつも勉強を丁寧に教えてくれました。頑固で厳しくて、でも温かくて・・・。そんな祖母を私は心から慕っていました。私は祖母といる時間が大好きでした。

でも、高学年になった頃から、私は祖母に反抗するようになり、気分によっては悪い態度で接することが多くなりました。祖母はいつでも私に対して愛情をもって接してくれていたのに、私は目をそらし、機嫌のいい時だけ仲良くする・・・。今はそんな自分をとても後悔していて、自分自身に腹が立ちます。

私は祖母がいることを、当たり前だと思っていました。

でも、今年の二月。祖母は倒れ、意識が戻らないまま深い眠りにつきました。最初は何が起きたかわからず、目の前のことが信じられませんでした。しかし、祖母の冷たくなった手に触れ、ようやく現実だと認めることができました。

私は空っぽになりました。それからしばらく何も集中できず、ぬけ殻のような状態が続きました。何でくだらない反抗なんてしたんだろう。何でもっと素直になれなかったんだろう。恩返しもろくにしてないのに・・・。そんな自分が腹立たしくて、情けなくて・・・。

倒れるなんて予想もしてなかった私は、その日いつものように反抗していました。そんな私をみて祖母はやれやれという風に私に板チョコを渡してくれました。私と祖母が大好きで毎日一緒に食べていたものです。チョコを受け取った私は冷たくお礼を言い放って、祖母の家を後にしました。その時、チョコをもらって喜ぶ私の姿はありませんでした。

これが、祖母との最後のやり取りです。祖母との思い出がいっぱい詰まった板チョコを私は今でも食べることができません。とても苦い思い出です。

私は今年、ピアノの発表会でラヴェルの「亡き王女のためのパヴァーヌ」という曲を弾きます。この曲は、ラヴェルがルーブル美術館にあった一枚の若い王女の絵にインスピレーションを得て作った曲です。ゆったりとした優雅な曲で、哀愁を帯びた旋律がさらに悲しみを誘う感じのとても美しい曲です。この曲と曲名の美しさにひかれ、まだ祖母が元気だった頃に選曲しましたが、今となっては、悲しい偶然になってしまいました。祖母は毎年かかさず花束をもって発表会に来てくれました。でも、もう祖母はいません。祖母の死後、この曲を弾き続けるか迷いましたが、生きている時に伝えられなかった感謝の思いをこの曲に込めて、天国の祖母のために「亡き祖母のためのパヴァーヌ」として演奏したいと思いました。

あなたは大切な人が側にいることを当たり前のように思っていませんか。自分を思ってくれる大切な人がいてくれることは、奇跡です。いつ失ってしまうかは、誰にもわかりません。だからこそ、その奇跡をかみしめながら、感謝しながら、一日一日を生きていくのが大切なのだと思います。これが、私が祖母の死を経て学んだことです。日常の「当たり前」は、実は当たり前ではないのです。

たくさんの大切なことを教えてくれた祖母を、私は心から尊敬しています。これからの私の成長を、天国から見守っていてほしいです。

奨励賞

ひとりじゃないから

七尾市立田鶴浜中学校二年　　森田　美悠

「ねえ美悠、本当に行っちゃうの？」

今まで何度そう言われて涙をこぼしたことでしょう。

私は中学一年生のある時から友達との会話が途切れるようになり、気が付いたら、私の周りから友達が減っていきました。信頼していた友達までもが心が離れていってしまい、ますます何がどうなっているのか分からなくなっていったのです。

だから一時間一時間の授業が苦しくて苦しくて、先生の言葉も耳に入ってこなくなり、しまいには我慢ができなくなって、ついに母に打ち明けました。すると母は

「つらかったね。よう我慢したね。でも、学校には行かんとだめやからね。」

と予想外の返事でした。その母の言葉が理解できず、母さえも私の気持ちを理解してもらえなえないことに、絶望しました。

毎日がつらく、ひとりぼっちの日々が続いたある日のこと。母がこう切り出しました。

「引っ越ししようと思うがいけど・・・」

その言葉を聞いて驚きはもちろんのこと、今の環境から解放されるという喜びでいっぱいになりました。

でも、その気持ちとは裏腹に、引っ越しを打ち明けた吹奏楽部の友達や先輩が

「みーがおらんくなったらウチらどうすればいいが？」

と涙ぐみ、気持ちが混乱するような言葉をかけてくれました。

さらに、顧問の先生も

「あんたなら向こうでも頑張れるわいね。応援しとるよ。」

と励ましてくださいました。

この時、私は初めて気付いたのです。ひとりぼっちだと思っていた私に、こんなにたくさんの人たちが私を必要とし、想っていてくれたことを・・・。

さらに、母のあの言葉の意味に気付きました。

「学校へ行かんなんだめ。」

とは、自分の嫌なことから目をそむけて、逃げていてはだめだ。ということだったのです。

私は今、仲間との別れと転校を経て、田鶴浜中学校の二年生です。もちろん、吹奏楽部に入部しました。

始めは吹奏楽部の皆となじめるかどうか、とても不安でしたが、新しい環境をくれた母や自分のためにも前向きに歩み始めました。

特に吹奏楽では低音のバリトンサックスを任せられました。それがとても嬉しいと同時に私を受け入れてくれたことに感謝し、今まで以上に練習に励みました。

吹奏楽はすべてのパートがそろって初めて成り立ちます。パートのたった一人の音が欠けるだけでもハーモニーのバランスが取れなくなります。だからこそひとりひとりの音が大切なのです。いえ、ひとりひとりの心も大切なのかもしれません。

そんなある日、皆で合奏をしていた時のことです。吹き終えた瞬間、先輩が

「今の良かったぜ。」「美悠ちゃんが浜中に来てくれて良かったわ。」「ありがとう」と言ってくれました。私が浜中の仲間になったと感じた瞬間で、とてもうれしかったです。と同時に吹奏楽をやめなくて良かったと思い、仲間との絆を感じました。

私は今、ひとりではありません。吹奏楽、家族、学校の皆がいます。私を支えてくれる仲間が大勢います。寂しいと感じる日は全くありません。

私のように寂しいと感じている人はいませんか。

私は友達や周りの人にたくさん支えてもらいました。だからこそ、支えてもらった分、今度は私がいろんな人の支えになっていきたいです。

奨励賞

大田楽

加賀市立山代中学校　三年　　立山　芽衣

私は小学四年生の時から「山代大田楽」に参加しています。山代に転校してきた私を、友達が誘ってくれたことがきっかけでした。

「大田楽」は平安時代に大流行した「田楽」が元になっています。五穀豊穣を願って行われた楽と踊りからなる「田楽」を、野村万之丞という狂言師の方が、完成させたものが大田楽です。山代では、カラスが温泉を見つけたという伝説を盛り込んで、毎年夏に行われています。

「大田楽」は振り付けが難しく、体の使い方が普段とは全く違うので、とても大変です。

でも、みんなと踊っていると、楽しくて、踊り終えた後は、達成感や感動がうまれます。また、山代だけでなくいろんな地域の人たちと交流できるというところが、大田楽のいいところだと思います。

大田楽は、これまでに韓国やハワイ、ワシントンなどで海外公演が行われてきました。今年は、ワシントンに日本の桜が伝わって百年。それを記念して、ワシントンの桜まつりに、再び大田楽がオファーされました。

今回のワシントン公演は、大田楽の披露に加えて、大学でのワークショップの企画もありました。

私はこの話を聞き、この公演に「ぜひ参加してみたい」という気持ちになりました。しかし現実には、私はまだ中学生。「行くと周りの人の迷惑になる。行かない方がいいんだ」と自分に言いきかせもしました。

母にこの話をすると、「こういうチャンスは二度とないよ。中学生の間に海外にいくなんて、絶対にいい経験になるから。行くかいかないかは、めいが決めなさい。」と言ってくれました。

私と同年代の子は一人もいません。大人の中に中学生一人で、ちゃんと自分で行動できるかを考えると、不安になりました。

でも、やっぱり「海外に日本のことを伝えたい。踊りをみてほしい」と、アメリカに行くことを決心しました。

そして迎えた三月。ワシントン、フィラデルフィアなど五か所で大田楽を披露しました。さまざまな肌の色の人たち、民族の人たちが一つになって見てくれている。そのことに感激しました。

大学のワークショップでも、さまざまな年齢の人が、参加してくれました。

こんなにもたくさんの人たちが、大田楽に、日本の文化に興味をもってくれている。そう思うと、ワクワクして、余計に一緒に踊ることが、うれしくてたまりませんでした。

日本語や踊りがわからなくても、ジェスチャーで伝えたり、まわりの人たちが通訳してくれたり、言葉や国境を越えて通じ合えるのだ、ということが分かりました。

また、私が中学生だからという気遣いや子ども扱いは全くなく、平等に一人前として接してくれました。一人の人間として、伝統芸能を伝える一員として、認められている。そのことに改めて、気づかされました。

それまで、私にとって大田楽は、踊っていて楽しいし、たくさんの人と交流ができるという程度のものでした。しかし、今回のワシントン公演を通じて、印象が変わりました。

ワシントンで、日本の文化を紹介するために選ばれたのが、大田楽。この大田楽には、海外のたくさんの人たちをひきつける力がありました。そして、そんな日本文化を伝え、広めるという役割を、私自身が担っていたのです。　これまで感じていなかった、日本の伝統文化というものに対する責任を、改めて意識することができました。

私はこれからも、山代大田楽を続けていこうと思っています。そして、本物だけが持つ力、伝統文化の魅力を伝えていきたいと思います。

奨励賞

国際交流を通して

能美市立寺井中学校　三年　　中　千聖

この夏私は、韓国の大徳中学校を訪問する使節団に参加しました。これは寺井中学校の国際交流事業の一環として行われているもので、一年おきにお互いの生徒をホストファミリーが受け入れるというものです。

昨年、ホストファミリーであった私の家は、大徳中学校の生徒を二人受け入れました。その時、初めはぎこちなかった三人の関係も徐々に打ち解け、時間の経過とともにとても仲良しになっていきました。いつまでもこうしていたいと思えた時、別れがやってきました。「必ずまた来年会おう。」と固く再開を約束し、私たちは別れを告げました。今回の韓国訪問は、その友達との約束を果たすことが初めの大きな目的でしたが、結果として、これまで私が持っていた韓国へのイメージや世界観を変える大きな影響を与えることにもなりました。

韓国は飛行機を使えば、一時間半程で行くことができる、日本に一番近い外国です。しかし、その文化・言語・生活習慣においては、とても大きな違いがあります。訪問して初めに感じたのは食文化の違いでした。例えば、食事をする際に、箸を使うのは同じなのですが、ご飯やスープはスプーンを使って食べたり、日本では、良くないとされている、茶碗を持たないで食べるという行為は、逆に正しい食べ方とされていたりします。他にも、食事をするときに女性があぐらをかく習慣があったりトマトを野菜ではなくフルーツとして扱っていたりしましたが、これにはやはり少し抵抗がありました。ただ、目上の人が食べ始めるまでは決して箸をつけないという、年長者を敬う考え方は大いに見習うことがあると思いました。

次に生活様式や習慣においての違いですが、家の造りは洋風のものが多く、トイレとシャワーが同じところにあったり、どの部屋の床もフローリングだったりと、ホテルなどによく見られる様式の家造りが主流だそうです。また、交通ルールは、車が右で人が左、という日本とは全く反対であることに初めは戸惑いました。

このように日本と韓国では違うところが多いのですが、共通点もあって親近感を感じることもたくさんあります。東洋人としての顔かたち、皮膚の色はもちろんですが、言語の中に似たような発音をする言葉があったり、挨拶をするときの動作なども似ていたりします。そして最も私に親近感を感じさせてくれたもの、それは優しさと笑顔です。韓国は優しさと笑顔であふれていました。荷物をさりげなく持ってくれたり、ご飯を食べていて、私のお皿が空になりそうになると、すぐによそってくれたりしました。また、言葉が通じず困っていた私に笑顔で話しかけ、緊張を和らげてくれる心遣いに、私は感謝の気持ちでいっぱいになりました。

日本と韓国の言語の違いが、意思の疎通や文化の交流をする上で、大きな壁となって立ちはだかっています。その国の言葉の習得は多くの時間と労力を要するからです。壁は他にもあります。それは心の壁です。先に私は、韓国は日本に一番近い外国であるといいました。しかし、その近さゆえに悲しい歴史があったことも確かで、公州博物館を訪れたとき、そこの係員の方から伺った話には大きな衝撃を受けました。戦後七十年近くたった現在もその影響はいろんな所に現れています。でも、過去の過ちによる不信感からくる心の壁を取り除くことは、本当にそれほど難しいのでしょうか。初めはぎくしゃくしていた関係も仲良しになれた私たちのように、お互いの立場を理解し尊重する姿勢を持つことで解決できることはたくさんあると思います。

今、日本と韓国の間では、スポーツや文化の交流が盛んに行われています。また日本にいても韓国の文化に触れることができます。それは本当に素晴らしいことですが、本場でしか味わうことのできない雰囲気や人々の優しさ、笑顔により多く触れたとき、本当に交流ができたといえるのではないでしょうか。そしてその実体験にこそ、お互いの国を理解する国際交流の、真の目的があると私は思います。

もし将来、またこのような機会に恵まれたら積極的に参加して、もっと見聞を広め、社会に役立つ人間に成長していきたいと思います。

講　評

学校指導課　課参事　中田　一宏

本日、中学生らしく、そして大変素晴らしい主張をしてくれた十六名の皆さん、本当にありがとうございました。

中学生という心も体も大きく成長するこの時期に、身の周りに起こった様々な出来事などを深く見つめ直し、自分自身の心と向き合って考え、表現することはとても大切なことです。

皆さんは、今日の県大会に来るまでに、自分の思いや考えを豊かに分かりやすく伝えようと、構想を練り、話しの展開や表現を工夫し、それが聞く人の心に届くように、何度も発表の練習を重ねてきたことと思います。

そのため、いずれの作品も個性に溢れ、意図が明確であり、語る姿も自信と誇りに満ち、まさに「少年の主張」にふさわしい発表ばかりでした。

この大会が全国大会へとつながっていることから、結果として、最優秀賞、優秀賞、奨励賞と分けざるを得ませんでしたが、いずれも僅差であり、結果云々より、まずは皆さんのここまでの努力に敬意を表します。

本日の発表会において、皆さんは、日常の生活の中で見つかった様々なテーマを取り上げて発表してくれました。

・「夢や向上心を持ち、あきらめずに頑張り続けること」「自信を持って自分らしさを大切にすること」など、自分をさらに高めようとする内容
・「人との繋がりを大切にすること」「周りの人を思いやり、感謝の気持ちを持つこと」など、他の人とともによりよく生きようとする内容
・「公正でイジメや偏見のない社会を実現すること」「伝統文化や異文化を理解すること」など、よりよい社会の実現を目指そうとする内容

など、発表者自身が考えたこと、心に留まったことを、自分の言葉で具体的に分かりやすく語っており、皆さんの気持ちや思いがよく伝わってきました。

今、学校現場では、「さまざまな問題に積極的に対応し解決する力」や、「他人を思いやる心や感動する心」など、よりよく生きる力を大切にしています。

皆さんは、今日、発表者として、日頃身に付けてきたこれらの力を生かし、堂々と発表されました。また、他の発表にも耳を傾け、共感できたのではないかと思います。皆さんにとって、この「少年の主張」での経験そのものが貴重な財産であり、これから進む道の中で、このことを生かし活躍されることを期待しています。

本日は、素晴らしい主張に触れさせていただき、本当にありがとうございました。発表された皆さんや支えたいただいた方々、この大会に関わってこられた皆様に感謝申し上げ、講評といたします。